

## 第3章 武家社会と東アジアをどう教えるか

広島県 公立中学校教諭

### 1 概要

第3章「武家社会と東アジアについて」では、武士の登場から鎌倉・室町（戦国）時代までの中世の歴史を扱っている。

中世においても世界とりわけ東アジアとの関わり、そのなかでも貿易を通しての交流について見ていく。

### 2 教科書の特徴

#### (1) 時代の特徴をイラストにより つかむ

教科書p.64～65の「中世② [15世紀] (想像図)」のイラストを生徒にまず、じっくり見させる。様々な発見やおどろき、疑問が出てくるであろう。次に教科書p.34～35の「古代 [7～8世紀] (想像図)」と比べてみる。人々のようすに注目すれば、服装が大きく変化していることに気がつく。この他にも家の

ようすや子どものようすなどさまざまな相違点があげられる。

その時代の特徴いわば全体像をイラストにより「イメージ」として把握することは、生徒にとり歴史学習の軸ができてくるように思う。



「中学生の歴史 初訂版」p34～35

このようなイラストを利用して、生徒に発見させていく授業は生徒も興味を持って取り組みとても多くの発言が出てくるのだが、注意したいのはその一つひとつに発見や疑問または古代からの変化のことがらに教師も生徒も意識を取られることである。このイラスト



「中学生の歴史 初訂版」p.64～65

の使い方は、この中世の各授業の「導入」として、「展開」として、「まとめ」としてなど様々な使い方が考えられるが、はじめの目的のように「時代の特徴をイラストでイメージとしてつかむ」のであれば、個々の発見をいくらかあげた後で、必ず、「なぜ、このような状態になったのか？」という古代からの変化の主要

な要因を考えさせることが大事である。民衆の活動（商売等）と交易の活性化は生産力の向上がないとあり得ないのだから。

## (2) 地図の活用

日本と東アジア各地との貿易（交易）では、地図を有効に使いたい。教科書p.69「③14～15世紀の東アジア」では倭寇とそれを乗り越えた日明貿易（勘合貿易）の航路等が図示されている。

また、教科書p.70～71には、当時の「琉球」と「アイヌ」がアジアと行った交易のようすが図示されている。見開き2ページにわたった横長の地図を使い、ダイナミックに描かれている。東アジアだけでなく、北東アジアや東南アジアまでにおよぶ広範囲な交易を理解させるには効果的である。



「中学生の歴史 初訂版」 p.69

## (3) 琉球とアイヌを通して

この帝国書院の教科書の特色として大きくあげられている「琉球」と「アイヌ」について詳しく扱われている。「琉球」＝沖縄、「アイヌ」＝北海道という場所の認識はあっても、それぞれの歴史的な歩みについては、生徒はほとんど知らない。中世においては、両者とも日本の支配下にはなく、琉球は独立した王国であり、アイヌは独自の文化を築いた状況であった。

この「琉球」と「アイヌ」を詳しく学習することは、現在の沖縄の問題やアイヌ民族の問題について理解するバックボーンになるのではないかと思う。

たとえば、北海道の地名を地図帳で調べさせるとカタカナの独特の地名に気づくであろう。札幌（サッポロ）や積丹（シャコタン）半島などをあげてアイヌ語の存在から独特の文化＝「アイヌ文化」を築いていたことを理解させたい。

また、アイヌの人々が今も北海道で生活していることを生徒に伝えたと生徒から驚きや疑いの声があがることがよくある。「白老」のアイヌ村などのようすを生徒に話すなどして、




「中学生の歴史 初訂版」 p.70～71


現在のアイヌの人々の生活を少しでも生徒に伝えるようにしたい。

#### (4) 人物を通して理解する

教科書p.67には「後醍醐天皇」と「足利尊氏」、この二人の人物の思いや行動を対比することにより、南北朝時代という歴史上類い希な時代を理解させるのに大変有効となっている。

<p>ごだいご <b>後醍醐天皇</b> 1288~1339</p> <p>理想と野望にもえる天皇</p> <p>31歳で即位した天皇はみずから政治を行い、身分にとらわれず人材を登用しました。倒幕のためには、悪党勢力も味方につけたのです。</p>	
---	---

「中学生の歴史 初訂版」 p.67

<p>あしかがたかうじ <b>足利尊氏</b> 1305~1358</p> <p>棟梁の「資格」をもつ武士</p> <p>尊氏は、源氏の血すじて棟梁にふさわしい人物でした。北朝が優位になったのも、かれに対する武士からの高い評価があったからです。</p>	
--	--

「中学生の歴史 初訂版」 p.67

#### 「後醍醐天皇」と「足利尊氏」について

後醍醐天皇と足利尊氏は、協力して鎌倉幕府を倒すのに成功した関係だが、「同床異夢」であるところが興味深い。

尊氏は源氏のなかでも最も高貴な血筋である自分が「征夷大將軍」になり、武士のための本当の幕府をつくろうと考えていた。

一方、後醍醐天皇は倒幕に際してどのように武士が活躍しようが、そのなかから誰かを征夷大將軍にするつもりなどもうとうなく、めざしているのは天皇親政である。誰かを将

軍に任じてしまえば、再び幕府ができて実質上の権力をうばわれてしまう可能性があるからである。

やがて、後醍醐天皇の「建武の新政」が武士のためにならないと感じ始めた尊氏は、後醍醐天皇に自分を征夷大將軍に任じてくれるように再三にわたり願い出たが、天皇は許すはずがない。しびれをきらした尊氏は、みずから征夷大將軍と名乗り、京都に幕府を開くのである。

(参考 「天皇になろうとした將軍」 井沢元彦著 小学館)

このような二人の人間模様を授業で扱えば、「南北朝時代はどのようにして始まったのか」という理解におおいに役立つと思うのである。

また、教科書p.54~55にも「平将門」、「平清盛」の二人の人物が取り上げられている。

<p>たいらのまさかど <b>平将門</b> ?~940</p> <p>「新皇」をめざした武士</p> <p>将門は、一族の紛争をきっかけにして、939年常陸の国府を占領しました。新皇を名のり、兄弟らを開東諸国の国司に任命しましたが、短期間で鎮圧されました。</p>		<p>たいらのよしみり <b>平清盛</b> 1118~1181</p> <p>はじめて太政大臣になった武士</p> <p>保元・平治の乱の勝利者となった清盛は、後白河上皇の信頼を得て出世し、政治の実権をにぎりました。平氏への反発が強まると、福原京へ都を移そうとしますが、失敗に終わりました。</p>	
---	--	--	---

「中学生の歴史 初訂版」 p.54・55

このように人物の思いや動きを通して歴史を理解することは小学校で行っているが、中学校での歴史学習は通史となり、ややもすると、味気ないと感じる生徒もいる。このギャップを埋めるためにも「人物を通して理解する」ことを授業で扱えば、より当時の「ことがら」の理解が深まるだろう。


### 3 授 業 案

#### (1) 単元 琉球とアイヌがになう東アジアの交易 (教科書 p.70 ~ 71)

#### (2) 本時のねらい

○琉球王国とアイヌを通じた交易は、東南・東北アジア一帯のネットワークの一部を形成したことをとらえる。

#### (3) 展開

流れ	学習活動	学習支援	教科書の図版資料
導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>●琉球とは何か</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●沖縄との答え</li> <li>●沖縄って日本なのか</li> </ul> <p>現在の沖縄にあたるが、今とは違い「一つの独立国」であることをおさえる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「守礼門」の写真をつかう (これは見たことがあるかもしれないが、昔の「琉球王国」の時代のものではない)</li> <li>・教科書p.70の「歓会門」を見せ、これは「琉球王国」のものであると解説する</li> </ul>
展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>●地図を見て、琉球が貿易しているところはどこか</li> </ul> <p>朝鮮の釜山(プサン) 中国南部の寧波(ニンポー) や福州(フクシュウ)、広州(コワンチョウ) やシャム(現タイ)、安南(現ベトナム) マラッカ、スマトラなど</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●琉球はどのような貿易をしていたのか</li> <li>●アイヌ文化はどのようにしてつくられたか</li> </ul> <p>オホーツク沿岸から根室半島までの地域=オホー</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●教科書p.70~71の上の地図を見てひとつ、ひとつおさえる。</li> <li>●地図帳でも見つけさせてみよう</li> <li>●中継貿易を理解させる</li> <li>●貿易品については、かんとんに扱う</li> </ul>	 <p>歓会門</p>



	ツク文化、北海道のそれ以外の地域の擦文文化がオホーツク文化を吸収（13世紀）して、アイヌ文化をつくる  ●青森県の十三湊（とさみなど）は、アイヌとの貿易の起点であったどのようなところか		
まとめ	●琉球とアイヌの交易は東南アジア・東北アジア一帯のネットワークになることを白地図にまとめる	●白地図はかんたんなものを用意し、琉球とアイヌの交易が広範囲におよぶことを理解させることをねらいとする。	
発展	●琉球やアイヌの貿易品について詳しく調べていく	●貿易品を調べていくと当時の琉球やアイヌの人々の文化や自然環境などさまざまなことが発見できる。	

今回授業案でふれた時代以前にも、歴史教科書では、古代から、琉球とアイヌについて記述されている。

琉球の場合、薩摩藩による「交易と支配」、太平洋戦争時における「戦場としての沖縄」、戦後日本への「本土復帰」、それから現在まで続く「米軍基地問題」で学んでいる。アイヌの場合、坂上田村麻呂による「蝦夷征伐」、松前藩による「交易と支配」、屯田兵による「移住と開拓」、それから現在も残る「アイヌに関わる諸問題」がとりあげられている。

これらを見るとおもに近現代史で扱われることが多いことに気づく。したがって、公民と扱うものが重なっている。

歴史で琉球とアイヌを扱う意義は、第一にこれまでの中央から見た歴史観だけでなく、地域から見た歴史観が重要であるということ

である。我々はとかく中央の歴史（とくに政治史）に目が行きがちだが、琉球やアイヌのような地域から見た視点があると、全く違う解釈が可能となってくる。

第二に両地域とも独自の文化を形成しており、最も身近な異文化理解の場である。中国や東南アジアや日本の影響が感じられる琉球文化、文字を持たず、アニミズムの要素の強いアイヌ文化は良質な教材となりうる。

琉球やアイヌを扱うことによって、違う視点・複眼的視点で物事を見られるようになり、グローバル社会で多面的・多角的に歴史事象を学べるようになる。

授業進度もあり、なかなか両地域を掘り下げて学習することは難しいかもしれないが、ぜひ東アジア交易など関連づけて、扱っていただければと考える。